

# 一步を踏み出してみませんか？

～技術士（建設部門／港湾及び空港）～

### 受験の動機・経緯

国土交通省に入省した1年目、私は現場の事務所に配属になりました。初めて触れる業務や工事の発注。応札者には技術士をはじめとした有資格者の配置を求めます。そして、契約後にはその方とともに仕事を進めていくことになります。発注者には、有資格者と同等の能力が求められることは、これまで多くの先輩方が本欄にて指摘されてきたとおりです。

とはいえ、当時まだ採用されたての一年生。知識・経験などでは赤子同然、そもそも技術士第二次試験の受験資格すらありません。それでも、学生時代に学んだことを活かし、少しでも周囲に近づけるようにと、まずは第一次試験を受けることとしました。平成16年度のことです。

それから十数年。採用2年目以降は、本省や整備局等で主に計画・企画部門の仕事をしてきました…というのを言い訳に、いつしか第二次試験の受験資格を得てからも、「次の一步」を踏み出すことが中々出来ませんでした。書店へ行っても、試験対策本のコーナーを眺めはするものの、結局はスルー。そうこうしているうちに申込期限が過ぎて…ということ

を数年繰り返していたように思います。

そして、平成29年度になり、久々に現場の事務所に配属となりました。新人の頃と違い、発注者として責任がある立場。周囲からは、当然、それに足る能力を有しているものとして見られます。技術士の資格を取ることで、自らの知識をアップデートしたい、そしてそれを客観的に証明したい、そう思い第二次試験を受験することとしました。

### 筆記試験における傾向と対策

第一次試験は前述の通り平成16年度に受験しましたので、その頃の経験はあまり皆さまのお役に立たないと思います。ただ、とにかく過去問を繰り返し解いて記憶したことを覚えています。これは今も受験対策の王道ではないでしょうか。

第二次試験は、平成30年度に受験しました。試験方法の改正前の最後の試験です。改正後の試験については、日本技術士会のウェブサイト等から最新の情報を得るようにして下さい。

#### ・必須科目

私の受験時は択一式の形式でした。出題される問

題は、非常に多岐の分野にわたり、しかも知識が無いと全く歯が立たない問題も多いです。他方で、毎年出題される問題には一定の傾向がありましたので、過去問をひたすら頭にたたき込みました。

本稿の執筆にあたり、公表されている過去問を見てみました。令和2年度試験では、「担い手確保」「インフラのメンテナンス」から1問選んで論述する形です。その前年度は「生産性向上」と「国土強靱化」。いずれも、国土交通省の極めて重要な政策ですので、国土交通白書等を熟読して勉強すると良いかと思います。

#### ・選択科目

私は「港湾及び空港」で受験しました。

「専門知識及び応用能力」の設問では、物流、計画、維持管理、施工という幅広い分野の中から選択して論述する形でした。「問題解決能力及び課題遂行能力」も同様に、様々な観点からの設問があります。それぞれの得意な分野について、やはり国土交通白書等で基礎知識を押さえておくのが良いと思います。

#### 口頭試験における傾向と対策

私の場合は、勤務地の関係上、誰か先輩に模擬面接をしてもらうという機会を得ることがないまま、独学にて本番に臨みました。本来、これはおすすめできるものではありません。

代わりに、定番の「3義務2責務」をはじめ、技術士制度創設の背景、技術士法の目的・定義等、倫理要綱を、簡略化してメモにまとめました。加えて、志望動機、これまでの経歴、受験申込書に記載した業務の簡潔な説明や事例として選んだ理由、技術士としてふさわしい点、発揮した専門能力…等々、あ



国土交通省 港湾局 産業港湾課  
首席国際調整官

ひらさわ こう  
平澤 興

(取得した資格：技術士(建設部門／港湾及び空港))  
資格取得年度：平成30年度

りとあらゆる想定問答もメモにまとめ、それを通勤途中などにひたすら読んで記憶するとともに、時間を計りながら実際に声に出して話すスピードを調整する練習を行いました。

上記の対策である程度は対応できたのですが、実際の面接では、「筆記試験における答案では不足しており、書き加えるべき点は何か」について問われ、上手く回答することが出来ませんでした。これもよく指摘されることですが、筆記試験を受け終わったら、記憶の薄れないうちに自分の回答を書き出し、その回答の内容をよく分析して口頭試験に臨むことが必要だと感じました。

#### 受験者へのアドバイス、注意点、励まし等

受験して合格することがもちろん目標ですが、それに向けて努力する過程、そして合格後も自己研鑽を続けることが、技術者としての自分を大いに成長させてくれることと思います。

まずは、私のように足踏みせず、「一步」を踏み出してみませんか？